

令和7年度 有年中学校区小中連携教育 活動記録

1 令和7年度 小中連携教育研究部会具体的実践

- 小・中学校相互の授業研究を通して、子どもたちの実態の相互理解につとめる。
- 国語科の系統性（特に「古典」の領域）を把握し、指導の継続性をめざして指導の改善を図ることにより、小・中学校9年間を見通した指導の相互理解につとめる。

2 有年中学校区の活動報告

(1) 有年中学校

○実施日：令和7年6月25日（水） ○単元：1年国語科「矛盾」漢文

○実施方法：中学生の授業を小6の児童が見学

○事後協議

- ・苦手意識の高い古典も音読を繰り返すことで、親しみやすくすることができた。
- ・普段あまり聞きなじみのない言葉が「漢文」には用いられるが、班活動などを通して、意味を推測し、自分の知っている言葉に置き換え、正しく理解することができた。
- ・真面目で厳しさのある中学校の授業を想像していた小6生は、中学生が意欲的に発表し、音読を楽しむ姿を見ることができたので、中学進学への不安感を取り除くことができた。
- ・有年中学校では毎週水曜日、地域の方が心の教室で「お茶の教室」を行ってくださっており、小学生も参加することができた。
- ・小学生全員で、中学校の校舎、他授業を見学することができた。



(2) 原小学校

○実施日：令和7年7月1日（火） ○単元：6年国語科「声に出して読もう」

○事後協議

- ・本時は、「天地の文」（文語調）を言葉の調子や意味のつながりを考えて語を区切り、進んで音読することをねらいとした。（「素読」の追体験）
- ・区切りを考えることで、大まかな意味を捉えることにつながった。また、日本語特有の「調子」（七五調）のよさに気づき、リズムよく音読することができた。
- ・「誰がどんな人に、何のために書いた文なのか」という、児童自身の「問い」に基づいた授業展開であったので、自分事として学習に取り組むことができていた。
- ・児童は学習に意欲的に取り組んでおり、ペアで積極的に話し合い、協力して問題

解決することを楽しんでいた。また、互いに声をかけ合い、発表やがんばりなどをふりかえることができていた。

- ・未習の歴史事項については、時代背景が分かる絵本などの参考資料の提示により理解を促していた。
- ・児童にとって馴染みのない文語体の文章であっても、繰り返し音読することで、次第に慣れ、大意を掴みスムーズに読むことができるようになっていた。中学校段階での古文・漢文の文法や意味理解の前段階として、文語調の文体や文章にふれ、音読する体験活動を楽しみ、親しんでいく過程の大切さを再確認できた。



(3) 有年小学校

○実施日：令和7年9月5日（金） ○単元：6年国語科「伝統芸能の世界」

○事後協議

- ・本時は、狂言「柿山伏」の面白さを捉え、その工夫について考えることをねらいとした。
- ・小学生は感じたことを素直に表現する力がある。
- ・中学校では「根拠を明確にして説明する力」がより求められるため、小学校段階から理由付けを意識するとよい。
- ・体験的な活動は意欲を高める効果大きい。
- ・6年生は、自分の考えをもつ力は育っているが、論理的に整理して伝える力には個人差がある。



- ・小学校では「感じ取る・体験する」学びを大切にし、中学校ではそれを「根拠をもって説明する」力へとつなげていく必要がある。
- ・9年間を見通した指導の系統性を意識することの重要性を再確認した。

3 まとめ

昨年も課題となった「算数科・数学科のように、基礎学力と系統的な学習内容の積み重ねが必要とされる学習においては、小中学校相互の学習内容のつながりと指導方法の連携・深化・拡充が不可欠である。」という点において、小学生自身が見学する形をとることで、今現在の学びが来年以降の学びに繋がっていることの確認ができた。また、1年後の自分の姿をイメージすることができ、今後の学習への意欲に繋げることができた。

小中連携を通して、小学校段階での学びの積み重ねや中学校で求められる力を相互に理解することができた。また、子どもの姿を中心に協議することで、校種間の接続の在り方について具体的な視点を得ることができた。子どもの実態を共有することができたので、今後の授業改善につなげていきたい。

